

ポスター・コレクションのこと

佐伯祐三や荻須高德がポスターのあるパリの街角の有様を描いていたのは1920、30年代であった。佐伯の「ポスター貼り職人」なる作品はその商売道具まで物語ってくれて広告図に関するドキュメントとしての役割をも担ってくれ、喜ばしい限りである。荻須の「広告塔」も脳裏に焼き付いて、初めて彼の地に足を踏み入れた時でも然程に違和感を覚えさせないのも本当の話である。それよりも四半世紀も前の事を繙いてみようと思う。

19世紀末あたりに街角の藝術と称される印刷された大型の広告図を巡る論議が喧しく展開されていた。賛否両論の正反対の意見やアカデミズムが決して触れてはならない領域として捉える向きもあったが、広告図こそがその時々のもっとも熱い藝術であるとする強い発言があったからこそ、国家の機

関として「広告図」を研究の資とすべく広く集めて、それらを恒久的に展示する美術館を創設・運営すること、そして以後も蒐集活動を大いに展開し、以て後の時代に生きる人たちに嘗ての若しくは同時代の「鑑」を提供する、それが行政の務めだと言ってのけた御仁がいた。ロジェ・マルクスである。こう言った事を明言したのは「広告図の巨匠たち」と題する雑誌に於いてである。1896年の事であった。この雑誌はフランス内外のその筋の巨匠たちの作品、即ち縮小版「広告図」を綴じ込んで、愛好家の書斎の壁を飾るために提供しようと言う商業的意図の下での企画であった。元々雑誌の体裁で刊行されたものであるから、年間予約した者が刊行物の完揃を持ち込んでくれるのなら、



ロジェ・マルクス編『ポスター芸術の巨匠たち』装幀表紙(AN.3780)

その時代の斯界の寵児ポール・ベルトンの美しい装幀により立派な書籍に仕立て上げ、そして愛好家の書斎に新たな「美」を顕現させようと言う特別のサービスの提供すると迄申し出るのである。

我が美術工芸資料館は上に紹介したポール・ベルトンの装幀によるロジェ・マルクス本四冊を蔵している(AN.3780)。京都高等工芸学校図書部への受け入れは1902年10月2日で、受け入れ価格は4巻で合計80円35銭と破

格に高い。因みに5巻で完揃となるが、何故か第5巻、つまり1900年度分を欠いている。ともあれ開校直前の受け入れ・登録から考えると屹度これらは他の図案科用教材共々浅井忠による発意で、自らパリで買い入れ帰朝の際に日本に運び込んだのであろう。固よりこれらの書物(ポスター関連の資料は他にメンドロン本を数える程度で少ない)と、実物として1890年代にパリの街角を賑わせた広告図74点を持ち帰っている。それらの中には「学校の標本ではなく、浅井忠個人のものである」と付箋に明記したものもある(それらは何れもイタリア・ポスターである:ANs.3318,3320,3321)。ともあれ浅井と翌年帰国を果たした武田五一が持ち帰った主にウィーン関係のポスター等8点(ANs.3319,3331~3337)を併せると82点のヨーロッパ・ポスターで発売した。評価も高く、貴重とされるそれらの大半が1980年になるまで図書とも標本としても受け入れ・登録される事はなかった。この事に聊かの愕きを覚えるものである。以後京都高等工芸学校時代に広告図の受け入れは無い。

戦後、京都工芸繊維大学工芸学部として再出発し、意匠工芸学科設立に伴いこれら眠れる大いなる遺産の再発見が為され、加えて旧図案科1917年卒業の角尾篤彦が1920年代に主としてパリで蒐集した所謂「アール・デコ」期ポスター35点(AN.2679)を寄贈、同じく1922年旧図案科を卒業し、意匠工芸学科設立メンバーの一人で作家でもあった福永俊吉が1968年の定年退官に当たり寄贈した自らの作品を含めた内外のポスター59点(AN.2694)。

1980年の美術工芸資料館設立に伴い、当時既に斯界から熱い関心が寄せられていたこれらのポスター176点全てが茲に供用替えされたのである。

設立して間もない美術工芸資料館が以後どのような分野の資料の充実を図るべきか、少しは話題になったが、逡巡することなくポスター・コレクション充実の線で一致を見た事は言うまでもない。この四半世紀、歴代の館長はじめ学内外を含め多方面からの助言や支援が在ればこそ蒐集活動が継続・展開出来ていることに深く感謝するとともに、今後本館の責務の重さ

がいよいよ増すことを弁えるべく、初心に戻って過度のアフショマニーとしての活動に自らを駆り立てなければならぬと密かに誓う次第である。ともあれこの間蒐集し、正規に登録・受け入れを為した調査・研究対象としてのポスター資料は4244点を数える(2006年03月12日現在)。美術工芸資料館設立以後に蒐集したのは4068点であり、数の上から見ただけでも拡充の跡は顕著であろう。

○

主だった拡充結果を挙げてみよう。アール・ヌーヴォー期に広告図の大輪を咲かせたA.ミュシャの「椿姫



岡田三郎助による歴史的名作「三越呉服店」1910年(AN.5201-1／(6))

(AN.3274)」「ジスモンダ(AN.3275)」、19世紀末を飾った鬼オトゥールーズ・ロートレックの「ラ・ルヴェ・ブランシュ(AN.4815)」「ディヴァン・ジャポネ(AN.4816)」、アール・デコ期ではA.M.カッサンドルの「北の星号(AN.3432)」「ノルマンディー号(AN.4739)」、第一次世界大戦期合衆国、英国、フランス、ドイツ等の戦時ポスター約550点(ANs.3851~4528)、第二次世界大戦期合衆国の戦時ポスターとしてのベン・シャーンの2点(AN.4803)、同じくフランスは

ポール・コランの4点(AN.4870)、最近では日露戦争下モスクワで刊行された戦時ポスター4点(AN.5176)。勿論戦後の内外のポスターも精力的に蒐集しているが、その中でも特にポーランド・ポスターは700点を超える。また現代のチェコ[スロヴァキア]の作家ヨゼフ・フレイシャーの42点(AN.5200)も重要な位置を占める。日本のポスターとしては極初期、1910年の岡田三郎助による歴史的名作「三越呉服店(AN.5201-1／(6))」を入手してコレクションが画竜点睛を欠くと非難されることの無い

ように心掛けている。再度言うがこれからも大いに多方面の支援を受けつつ「時代の鑑、時代のひとつの証言者」そして「街角を飾った藝術の夢のあと」を追いかけるための縁をしっかりと蓄積しなければならないと強く思うのである。

KIT-NEWS 7~11 迄連載した本シリーズは本稿を以て終わります。この一年余りお付き合い下さいまして誠に有り難うございました。

(美術工芸資料館教授 竹内次男；2006.02.17.)